**（資料１）**

**爲三郎記念館爲春亭、知足庵、待合、雪隠、正門、東門（ためさぶろうきねんかんいしゅんてい、ちそくあん、まちあい、せっちん、せいもん、ひがしもん）**

員　数：４棟２基
所在地：名古屋市千種区掘割町
所有者：公益財団法人古川知足会

【概要】

「爲三郎記念館爲春亭」
構造、形式及び大きさ：木造平屋建一部地下１階建、瓦葺、建築面積 340 ㎡
建設年代：昭和９年(1934)／平成７年（1995）改修
（登録基準：造形の規範となっているもの）

「爲三郎記念館知足庵」
構造、形式及び大きさ：木造平屋建、銅板葺、建築面積 16.2 ㎡
建設年代：昭和 11 年（1936）頃／平成７年（1995）移築
（登録基準：造形の規範となっているもの）

「爲三郎記念館待合」
構造、形式及び大きさ：木造平屋建、杉皮葺、建築面積 2.6 ㎡
建設年代：昭和前期／平成７年（1995）改修
（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

「爲三郎記念館雪隠」
構造、形式及び大きさ：木造平屋建、杉皮葺、建築面積 1.8 ㎡
建設年代：昭和前期／平成７年（1995）改修
（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

「爲三郎記念館正門」
構造、形式及び大きさ：木造、瓦葺、間口 1.6m､左右袖塀付
建設年代：昭和前期／平成７年（1995）改修
（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

「爲三郎記念館東門」
構造、形式及び大きさ：木造、こけら葺、間口 1.2m、左右袖塀付
建設年代：昭和前期／平成７年（1995）改修
（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

「爲三郎記念館」は、名古屋市東部の丘陵地の覚王山地区に位置する実業家古川爲三郎の旧別邸である。覚王山地区は、昭和初期に名古屋市民の行楽地として親しまれてきた。周囲には明治 37 年

（1904）に覚王山日泰寺が創建され、明治 44 年（1911）に覚王山と千種間に市電が開通し、昭和 12 年（1937）の東山動植物園開園と同時に市電を東山まで延長した。そしてこの丘陵地帯は市街に居宅を構える旦那衆の別宅が点在する高級住宅地として発展した。

昭和９年（1934）に料理旅館「向陽館」の別館として上棟され、昭和 20 年（1945）に古川爲三郎の所有となり住居となった。一部戦災を被った部分に手を加え増築もあったが、平成５年（1993）まで創建時のまま維持された。

平成５年に財団法人古川会に寄贈、改修され、平成７年 11 月３日「爲三郎記念館」と命名され、古川美術館の別館として一般公開されている。

爲春亭は、敷地東寄りに東面して建ち、南西側を懸造[1]で庭園に張出す外観は変化に富んでいる。内部は南側に座敷二室と茶室を配し、各室とも数寄屋[2]を基調とした意匠でまとめている。

敷地の西に位置する知足庵は、尾張の茶人織田有楽斎の国宝「如庵」を模した二畳半台目[3]の茶室である。

敷地北辺に建つ待合・雪隠は、野趣にあふれ落ち着きのある露地空間を構成している。

敷地南面の街路からやや奥に開く正門は、入母屋造[4]で桟瓦葺、縁辺部は檜皮葺で左右に袖塀が付き、敷地東面に石段上にある東門は、こけら葺屋根の数寄屋意匠で整えられている。

「爲三郎記念館」の建物群は、数寄屋基調の意匠でまとめた良質な近代和風建築である。

---

懸造[1]：崖造ともいう。あるいは川岸・海岸・池畔などで、一部分を斜面あるいは水面に張出して建てること。

数寄屋[2]：数寄屋（茶室）風を取り入れた住宅の様式とされる。

二畳半台目[3]：丸畳二畳と半畳一畳と台目畳一畳で構成された茶席。

入母屋造[4]：屋根形状の一つで、切妻と寄棟が合体した形状の造り。

爲三郎記念館爲春亭　南面外観

（名古屋市教育委員会　提供）

爲三郎記念館知足庵　東面外観

（名古屋市教育委員会　提供）

爲三郎記念館待合・雪隠　南東外観
（名古屋市教育委員会　提供）

爲三郎記念館正門　南面外観
（名古屋市教育委員会　提供）

爲三郎記念館東門　北面外観
（名古屋市教育委員会　提供）